



ロシア資料から、日本語研究に新たな光を見いだす。

■担当教授より



人文科学研究院
あおきひろふみ
青木博史 准教授

自信を持って成果を発表してほしい。

彼女がロシア資料に注目し、研究対象として選んだのは、目の付けどころがよかったと思います。鹿児島出身の彼女なら、鹿児島の方言に内省が効きますからね。ロシア語という障壁がありましたが、これも独学で勉強をして相当程度理解できるようになっています。そういった研究への真摯な姿勢は評価できますし、誰にでもできることではないと思います。また、リーダーシップもあり、研究室では後輩を積極的に指導してくれています。

コミュニケーション能力が高いため、九州大学内だけでなく、学会で知り合った他大学の先輩や同輩の方などとのつながりも大切にしているようです。研究は、慎重かつ着実に積み重ねていっていますが、時には、大胆に提示することも大事だと思います。学振の特別研究員にも選ばれ、対外的にも認められていますので、自分の研究に自信を持って積極的に成果を発表してほしいですね。今後の彼女の研究に期待しています。



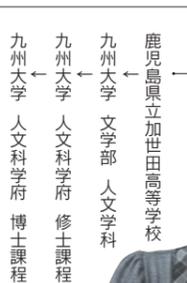
人文科学府 博士課程3年
日本学術振興会 特別研究員
Ai Kubozono

久保 蘭 愛さん

九州大学で学び、目指す分野を究めようとする次世代のプロフェッショナルを紹介します。今回は、江戸時代に邦人が編纂したロシアの言語資料をもとに研究を進められている若き女性研究者にお話を伺います。



久保 蘭 愛さん DATA



漫画が大好きという久保蘭愛さん。少女漫画から少年誌まで、ジャンルも幅広く、所有する漫画の数は研究書より多いのではないかとのこと。「研究に疲れたら、漫画を読みふけるか、友だちと甘い物を食べて発散しています」と、笑顔で話されていました。

九州大学の関連 WEB サイトへ
九州大学 人文科学府 [Go](http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp)
<http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp>

江戸時代に編纂されたロシア資料をもとに研究。

徳川吉宗の時代、薩摩を志向した船が嵐に遭遇しロシアに漂着。乗組員だった少年ゴンザは、ロシア政府のもとで露日辞典など6冊の日本語資料を編纂しました。その資料をもとに、ロシア語と鹿児島方言の関係を研究されているのが、久保蘭愛さんです。

大学の卒論テーマを探していた時、研究室の先輩からゴンザの資料を教えてもらったといいます。

「ゴンザの資料にはアクセント記号がついていて、音の研究はかなり進んでいました。でも、文法の形式についてはほとんど研究されていなかったんです。ロシア語を勉強している人なんて、そんなにいないだろうし、鹿児島出身の私は方言にも違和感がありませんでしたから、この資料で何か新しい発見ができるかもしれないと思いました。人と同じことをやっても、所詮、二番煎じにしかありません。誰もやっていないことを研究したかったんです」

られ、昨年、国立国語研究所チームの喜界島での聞き取り調査にも同行しました。

「喜界島の調査は、全国から研究者が集まり、文法、音声、アクセント、談話の4つのグループに分かれて実施する大掛かりなものでした。私は音声と文法の調査を行いました。喜界島は、行政区分としては鹿児島ですが、ことばとしては琉球の方言です。初めて触れる言語で戸惑いましたが、そんな時、どのように調査・分析すれば良いのか、先輩方のノウハウを間近で学べてとても良い経験になりました」



ゴンザの資料の編纂態度が、機械的であることを指摘。

ロシア語を勉強し、卒業論文では、ゴンザの資料が鹿児島方言とロシア語の対訳資料であることを踏まえたうえで、編纂態度が、ロシア語文を逐語訳した機械的なものであることを指摘します。その後、資料で受身を表すとされる「ゆる・らゆる」と、尊敬などを表すとされる「る・らる」も機械的な翻訳であるという結論に至りました。

「資料を編纂する時、ゴンザがロシア語を理解していたか定かではありません。また、日本でも文字教育を受けていたとは限らないので、慎重に調べる必要があります。このように、資料が作られた状況に留意しながら、そこに現れることばを考えていくことが重要なんです」

国立研究所チームの喜界島の調査にも参加。

文献を調査するだけでなく、フィールドワーク（＝現地での方言調査）にも積極的に出かける久保蘭愛さん。鹿児島を中心にお年寄りへの面接調査を進めています。その実績を認め

一般の人にも方言研究のおもしろさを伝えていきたい。

久保蘭愛さんは、高校生の時、古典文法の規則性に感心して、文法に興味を持つようになったそうです。本学に入学後、さらに国語学への興味が深まり、研究者の道を目指しはじめます。修士2年生の時に全国学会で発表。現在は、日本学術振興会の特別研究員として研究に取り組んでいます。

「日本語研究は、自分が話す言葉が研究対象になるので、日常の会話の中にも発見があります。将来は、一般の方にも方言のおもしろさをわかりやすく伝えていきたいですね」と久保蘭愛さん。若き女性研究者の今後の活躍が楽しみです。